

フランス系カナダの歴史にみる女性教師

——ガブリエル・ロワ『わが心の子らよ』の紹介を中心に——

天 野 知恵子

1 はじめに——フランス系カナダのカトリック世界

2015年夏、カナダのケベック州を訪れる機会があった。その際強く印象に残ったことの一つは、ケベックにおいては早くから、カトリックの女子修道会が活躍していたという事実である。州最大の都市モントリオールにある施療院の博物館 Musée des Hospitalières de l'Hôtel-Dieu de Montréal や、州都ケベック市にあるウルスラ会の博物館 Musée des Ursulines de Québec では、並べられた展示物の数々が、修道女たちの果敢な行動の軌跡を伝えている。彼女たちはフランス植民地ヌーヴェル・フランスのまさに建設当初から、強い使命感をもって新天地での布教をめざしたのである¹⁾。

先住民の娘たちをキリスト教徒に育てるという当初の目的は結局、ほとんど成果をあげることなく終わった²⁾。だが修道女たちは、フランス人植民者たちの子女を教育するという役割も担っており、こちらの方は確実にカナダの地に根づいていった。たとえば18世紀初頭、ウルスラ会は55～60人の寄宿生をあずかっていただけでなく、その数を上回るほどの通学生も抱えていたという。また1646年から1800年の間にウルスラ会に入会した166人のうち、117人が教師を務めたとの見積りもある³⁾。ヌーヴェル・フランスでは教育は修道会が担うものとされ、俗人の女性教師が登場することはなかった。

ヌーヴェル・フランスは18世紀半ば、いわゆるフレンチ・アンド・インディアン戦争でフランスが敗北したことによって消滅し、以後はイギリスの支配下に組み入れられていく。だがフランス系の人びとは、その後も長く独自の言葉や文化を守り続けた。彼らの精神的な支えとなったのはカトリック教会であ

る。支配者となったイギリスのプロテスタント的文化に対抗していくためにも、彼らはカトリック的伝統を自らのよりどころとしたのである。

20世紀前半、第三共和政期のフランスにおいて政教分離の原則が確立され、公教育における脱宗教の政策が進められていた頃にも、カナダのフランス語地域では教育はカトリック修道会に委ねられていた。一例をあげると、フランスでは1904年、修道会による教育が一切禁止され、公立学校はむろん私立の学校であっても、修道会が担ってはならないとする法律が可決されている⁴⁾。これとは対照的にケベックでは、1931年には男子教育修道会の、1939年には女子修道会の会員養成所が師範学校と同等の扱いを受けるようになった⁵⁾。1943年においてもケベックでは、初等・中等教育の教員のうち49%を聖職者が占めている⁶⁾。

他方でカトリック教会の強大な影響力は、カナダのフランス語地域における保守的・伝統回帰的な風潮を助長して、社会の停滞をもたらす要因ともなった。そうした側面はたとえば、20世紀の女性のイメージにも反映されている。その代表例としてよくあげられるのが、ルイ・エモン Louis Hémon (1880-1913) 作の小説『マリア・シャプドレーヌ』のヒロインである⁷⁾。

マリア・シャプドレーヌはケベック奥地の森の中に家族と住む若い娘である。物語の中では四季の移り変わりに寄せて、自然の中で労多くして生きる暮らしぶりが描かれている。人びとの心の支えはカトリック信仰であった。クリスマスの真夜中のミサに出ることは、「あこがれのまとであり、何より大きな希望」である⁸⁾。マリアはある青年に思いを寄せ、再会を願って聖母マリアへの祈りを千回も唱える。だが厳しい冬は、森を知り尽くしているというその青年さえ遭難させてしまうほど苛酷であった。マリアはやがて都会で働く別の青年から、ガスもあれば湯も出る「ふたりでの楽しい生活」を提供したいとする求婚を受けてとまどう。だが彼女は結局、母の死を経て自分の進む道を見出す。「われらの祖先のとどまった地方にとどまり、かれらが生きたように生きなければならない」というのである⁹⁾……大地の女神のようなこのマリア・シャプドレーヌの姿は、17世紀の開拓当初から変わることのない、素朴で敬虔な働き者としての女性のイメージを語っていた。

しかしながらカナダのフランス語地域も、ケベックにおける「静かな革命」に示されるように20世紀後半から大きな変化をとげる。たとえば今日のケベックでは、家族のあり方に関しても個人の自由が優先されるという。2002年には州議会で結婚によらない「市民的結合」を認める法律が可決され、同性婚の割合もケベック州が一番高いと言われるほどである¹⁰⁾。

このような社会動向を背景にして、フランス系カナダに関する女性史や女子教育史においても、「静かな革命」以降豊かな研究成果があげられている。ここではそうした文献も参考にしながら、ケベックにルーツをもちながらケベックではないカナダ・フランス語地域に生を受け、初等学校の教師を経てのち作家となった一人の女性の作品を紹介してみたい。取り上げるのはガブリエル・ロワ Gabrielle Roy (1909-1983) の『わが心の子らよ』(1977) である¹¹⁾。フランスで出版された『マリア・シャブドレーヌ』が反響をよびはじめていた20世紀前半のまさに同じ頃、カナダ西部マニトバ州のフランス語地域で教師となったロワがいかなる体験をしたのかを、以下では見ていくことにしよう。もっとも、当該地域に関する専門的知識の蓄積をもたない筆者の能力では、ひじょうに印象的な断片を切り取ることにしかできなかった。この点はあらかじめ断っておきたい。

2 女性作家ガブリエル・ロワ——その生い立ちと教師時代の日々

ガブリエル・ロワは1909年、マニトバ州のサン・ボニファスで生まれた。マニトバ州はかつては、カトリックのフランス系住民とプロテスタントの英語系住民とが拮抗した地域であったが、その後急速に後者の勢いが増し、1891年には、人口に占めるフランス系住民の割合は7%になっていた¹²⁾。それでも、州都ウィニペグを流れるレッド・リバーをはさんで東に位置するサン・ボニファスは大司教を擁し、マニトバのフランス系住民の中心地であった。ロワの家庭は裕福でこそないが堅実な暮らしぶり、移民局で働いていた父はガブリエル誕生の時点ですでに60歳を迎えようとしていた。というのも、彼女は11人きょうだいの末っ子だったからである。カナダのフランス語地域では入植当時から子どもが多かったが、ロワの家族も例外ではなかった¹³⁾。

彼女の父も母もケベックの出身である。19世紀末、プロテスタント系住民の急増で劣勢に立たされたマニトバのカトリック聖職者からの勧誘もあって、父は単身で、母は家族で一旗揚げようとケベックから移住してきたのだという¹⁴⁾。ロワ自身も、青年期の一時期をヨーロッパで過ごした後、帰国してからはモントリオールに居を定め、その後もケベックを活躍の場として生涯を過ごすことになる。それゆえ彼女はカナダ文学史において、ケベックの女性作家として知られている。

ロワが生まれた当時、英語を話す人びとが多数を占めていたウィニペグに對峙するサン・ボニファスは、明らかに異質な一角であった。ロワ最後の作品で死後出版された自伝『苦悩と歓喜』(1984)の冒頭、彼女は子どもの頃にレッド・リバーをわたってウィニペグに足を踏み入れるとき感じた思いを、次のように語っている。「私をはじめ、自分の国の中で劣るとされる種族に属しているのだと意識したのは、いつだっただろう……うちから目と鼻の先の距離なのに、はるか彼方へ入り込んでいくような、国外に出て行ってしまうようなこの感覚は、子どもの時にははかしながら、むしろ快く感じられた。それは想像力を刺激して私の目を開かせ、観察力を鍛えてくれたように思われる¹⁵⁾。」

フランス系住民であるという事実は、学齢期になるとより明確な形でロワに影響を与えることになる。というのも19世紀末から20世紀前半のマニトバでは、教育や言語に関わる政策を通してフランス系住民のマイノリティ化が進められたからである。1870年にマニトバ州がカナダ連邦に加入した時には、学校はカトリックとプロテスタントの宗派別に存在し、前者ではフランス語で教育を行うことができた。また英仏両語が公用語であった。ところが1890年、英語系プロテスタントの勢力増加を背景に、カトリック系公立学校への公費支出は廃止され、英語のみを公用語とする州の政策が打ち出される¹⁶⁾。その後、英語でない言語を母語とする子どもが多い場合には、英語とその言語による二言語教育を行うことや、公立学校でのカトリック教育も条件つきで認められるようになったが、公用語でなくなったフランス語を母語とする住民の地位低下は明らかであった。

ロワが入学したのは自宅からすぐの場所にあった公立のサン・ジョゼフ学校

Académie Saint-Joseph である。そこでは30人ほどの修道女が、12学年800人におよぶ女兒を教えていた¹⁷⁾。そしてロワが入学した第一次世界大戦中の1916年、まさにその年から、マニトバでは公立学校での教育は英語でのみなされるものと定められ、二言語の使用が禁じられてしまったのである。ロワが通った学校ではそれでも、フランス系の子どもたちに対するフランス語の教育は続けられた。修道女たちは州のやり方に対する抗議の意味を込め、無報酬で授業時間外にフランス語を教えたからである¹⁸⁾。

ところが幼いロワにはこれが負担となった。姉たちがフランス語で教育を受けることができたのに対して、彼女はまず何より英語を学ばなければならなかった。これにフランス語の授業も加わった。ひ弱な子どもであったロワにとって、英語主体でフランス語が入り交じる複雑な学習環境はストレスの多いものであったという。低学年の頃彼女は欠席が多く、芳しい成績をあげることはできなかった。だが長じるにつれ才能が開花し、高学年の時には毎年のように成績優秀者として表彰されている¹⁹⁾。幼い時期から苦労して学んだだけの甲斐あって、英語、フランス語2つの言語をしっかりと習得したことは、以後の彼女にとって強みとなったのであろう。

ロワはその後師範学校に進学して教師の資格を取り、1929年に、フランス語地域の農村カルディナル Cardinal の初等学校に赴任した。そして翌年には、サン・ボニファスにあるプロヴァンシェ学院 Institut collégial de Provencher に移動する。プロヴァンシェ学院はマニトバ教育省の管轄下に置かれた公立の学校で、初等・中等の12学年にわたり約1000人の生徒を抱える大規模校であった。修道会が経営する男子校であったが、年少の子どもたちの教育は俗人の女性教師に委ねられていた。ロワはここで数年間、第一学年の男児40人ほどを受け持つことになる²⁰⁾。

恐慌から第二次大戦にかけての1930年代、人びとの暮らしは厳しかった。若き女性教師ロワはその中で力を尽くした。生徒の一人は後に彼女のことを「とてもきれいでとても寛大な」先生であったと回想している。「学校の貧しい子どもたちのために最大限のことをしてくれた」という証言もある²¹⁾。ロワは長く教師を続けたのではなく、演劇に開眼して1937年にはヨーロッパに旅立

つのだが、それまでの間に体験したいろいろな出来事は、やがて作品『わが心の子らよ』に結実していくことになる²²⁾。

3 作品『わが心の子らよ』とその背景

『わが心の子らよ』(1977)はカナダ総督賞を受賞したロワ晩年の小説で、5つの短編と1つの中編の物語からなる。いずれにおいても主人公は若き女性教師で、彼女とさまざまな境遇の子どもたちとの心のふれあいを描いている。舞台となるのは両大戦間期のカナダ・フランス語地域であるが、この作品においては、ロワが幼少時に経験した英語的世界とフランス語的世界の対立はほとんど出てこない。代わりに示されるのは、多様な人種・民族から構成される多言語・多文化混在の社会の姿である。どの物語にも忘れがたい印象を残す子どもが主演として登場するのだが、その出自は実にさまざまである。

たとえば「ヴァンチェント」という物語には、登校時に、親から離れようとならない子どもたちが登場する。ある母親は、ふだんは聞き分けが良いのだと言い訳しながら、「フラマン語なまりの強い言葉で息子を紹介」する²³⁾。また、父親にしがみつぎ、イタリア語で何かしきりに訴えている子もいる。「そう言えば、ごく最近この町に、イタリア中部のアブルッツオ地方からやって来た移民がいる」というわけである²⁴⁾。こうした子どもたちをなだめすかすために、女性教師は日々あれこれ苦心する。

「ひばり」という物語の主演は、歌の上手なニルという少年である。彼が住んでいるのは屠殺場のそばの異臭漂う貧しい小屋で、母親は「母国語であるウクライナ語」の他には、ほんのカタコトしか話すことができない移民である。女性教師はニルが母から教わったウクライナ語の歌を聞いて感銘を受ける。そして彼を養老院や精神病院に連れていく。ニルの歌、すなわち、「母親が彼に託そうとした失われた祖国の歌」は、多くの人の心を揺さぶり、深い感動を与えるのだった²⁵⁾。

東欧からの移民の姿は、「デメトリオフの息子」という物語にも登場する。この話ではまず、低学年を受け持つ女性教師たちがそれぞれ、自分のクラスのデメトリオフに手をやいていると愚痴をこぼす場面から始まる。たくさんの息

子をもつ彼らの父親は、なめし革工場をやっているのだが、悪臭たちこめるそこは「ぐつぐつと湯が煮えたぎっている暗い穴ぐらのような場所」で、「まるで悪魔みたいに真っ黒な顔をしたデメトリオフ家の子どもたちが、父親の罵声を浴びながら」とび回っている有様だという²⁶⁾。主人公の女性教師は、彼らが住む「ロシア通り」と呼ばれている一角を訪れ、「ここでは私こそが異邦人であるのだ」という思いにとらわれる²⁷⁾。

「ロシア語しか……ロシア語もどきしか喋れない状態で」入学し、父親の仕事を手伝うために欠席が多い彼らの学習は、困難をきわめていた²⁸⁾。そこで彼女は、字を教えるにあたり、歌を歌いながら黒板に白墨で文字を書いていく方法を考え出す。授業参観日、教室に現れたデメトリオフの父親は、かつて息子の一人に問題があると言われて学校に呼び出された時、教室の壁にいきなりその子を投げつけ、怪我を負わせた前歴の持ち主であった。しかし今回は違っていた。黒板に向かって一心不乱に字を書いている息子の姿を見て、父親は息子を抱き寄せる。そして親子はぎこちない微笑みを交わすのであった²⁹⁾。

物語の社会的背景をさぐってみよう。カナダには1896年から1914年にかけての間に約300万人の移民が到来し、1901年から1911年の間にカナダの人口は43%増加した³⁰⁾。とりわけ大陸ヨーロッパからの多数の移民によって、「英仏両系が築いてきた19世紀のカナダ社会は永久に変貌した」と言われる³¹⁾。だが中・東欧からの移民を、為政者たちはあまり歓迎しなかった。というのも彼らは、この移民たちが同化を拒み、社会の分裂をもたらしかねない存在だと懸念していたからである。たとえば1920年代のイギリス系支配層は、「白人」を序列化し、「好ましからざる国々」の人びとには冷たいまなざしを向けた。当時の移民官たちの報告書には、次のような言葉が見られる。「中欧の移民の大半はまったく望ましからざる者たちです。ほとんどは、汚く不潔です。」「最も移民審査で厄介なのはロシア人であります³²⁾。」

それでも、政府関係者たちの思惑をよそに、さまざまな地域からの移民はマニトバ州にも押し寄せ、フランス語地域においてもその数を増やしつつあった。ロワが実際に教鞭を執ったプロヴァンシェ学院は、男子修道会が運営する

フランス語地域の学校である。そこでは何より英語を教えなければならない。ところがロワが受け持ったクラスは、実は「地球上のほとんどあらゆる国を代表している」かのように、「大半は英語もフランス語も知らない」子どもたちで占められていた。ロシア、ポーランド、イタリア、スペイン、アイルランド、チェコ、フランドル……出自はさまざまだが、大部分が移民の子どもたちである。新学期最初の日々、ロワは「身ぶりと微笑みで」彼らと意思疎通をはからなければならなかった。彼女はのちに、自分のクラスは「民族的多様性をもっとも豊かに備えた国の一つであるわが国に、ただただ似ていると思われた」と語っている³³⁾。このクラスを教えるのはたいへんであったが、やりがいも感じたのだろうか、彼女はここでは毎年、このような第1学年の子どもたちを担当したという³⁴⁾。

さて、最後にもう一度『わが心の子らよ』に戻ろう。作品中いちばん長い物語である「凍てついた川のます」では、主役となる子どもは、14歳のメデリック少年である。豊かな農場主の一人息子で、カウボーイハットを被り馬に乗って登校する。そして英国旗ユニオン・ジャックがはためくポールに馬をつなぐと、おもむろに入室してくる。学校になじむことができず、扱いに困るとされていた少年で勉強も遅れていたが、担任の女性教師の努力に対して少しずつ心を開くようになる。ある晩秋の日、彼は彼女を町から遠い丘に連れ出す。手でつかめるほどゆっくりとますが泳いでいくさまを見せたかったからである。冷たい川に手を浸すと、彼は教師に「本当に神秘的なんだ」と語りかける³⁵⁾。大自然の情景に魅了され、顔を輝かせる少年はやがて、百科事典を愛読するようになる……

彼の母は原住民の血を引く女性であったが、裕福な生活と息子を捨て、部族の暮らしに戻っていったのだという。大人の入り口に立とうとしている孤独な混血の少年と、18歳の誠実な女性教師との間に芽生えた淡い慕情……しかしながらそれは、息子に勉強を強いる父親の思惑も絡み、ためらいやとまどいのうちに終わりを迎える。任期を終えた教師が汽車で立ち去る日、馬で駆けつけた少年は、列車が速度を落とした際、腕を回して弾みをつけると、馬上から彼

女の膝めがけ窓越しに野の花の花束を投げ入れるのだった³⁶⁾……

ガブリエル・ロワの『わが心の子らよ』はこのように、カナダの雄大な自然を背景にして、若き女性教師がさまざまな問題を抱えた多種多様な民族的出自の子どもたちのために奮闘する様子を描いた、珠玉の物語集である。そこには、20世紀前半、ケベックにルーツを持ちながらケベックとはまた異なるカナダ・フランス語地域に生まれ育った一人の女性の、ユニークな体験が反映されている。

註

- 1) カナダに渡ったウルスラ会のマリ・ド・ランカルナシオン Marie de l'Incarnation (1599-1672) が書き残したたくさんの手紙から、当時の状況の一端を読み取ることができる。門脇輝夫訳、竹中豊・小林順子解説『修道女が見聞した17世紀のカナダ—ヌーヴェル・フランスからの手紙—』(東信堂・2006年) 参照。
- 2) アメリカ先住民の女性たちの教育は、18世紀の初めにはウルスラ会の誓願項目ではなくなっている。Nadia Fahmy-Eid et Micheline Dumont, *Maîtresses de maison, maîtresses d'école : Femmes, famille et éducation dans l'histoire du Québec*, Boréal Express, 1983. p. 66.
- 3) *Ibid.*, p. 67; Andrée Dufour et Micheline Dumont, *Brève histoire des institutrices au Québec de la Nouvelle-France à nos jours*, Boréal, 2004, p. 25.
- 4) 谷川稔『十字架と三色旗—近代フランスにおける政教分離—』(岩波現代文庫・2015年)、219頁。
- 5) 小林順子『カナダの教育1 ケベック州の教育—1600年から1990年まで—』(東信堂・1994年)、62頁。
- 6) 小畑精和・竹中豊(編)『ケベックを知るための54章』(明石書店・2009年)、183-184頁。
- 7) Louis Hémon, *Maria Chapdelaine*, Montréal, 1916, Paris, 1921. ルイ・エモンはフランス生まれのジャーナリストで、ケベックを見聞してこの小説を書いた。作品は初め新聞小説として掲載された。単行本としてまずカナダで出版された後、1921年にフランスでも出版されるや反響を呼び、映画化もされた。邦訳タイトルは「白き処女地」で山内義雄によるものである(山内義雄訳『白き処女地』角川文庫・1963年)。なおこの小説には絵本版もあり、こちらも邦訳もされている。ルイ・エモン原作、ライカ・クペイジック画、小池昌代訳『森の娘マリア・シャブドレーヌ』(岩波書店・2005年)。

- 8) エモン、山内訳『白き処女地』、93頁。
- 9) 同上、145頁、202頁。
- 10) 小畑・竹中 (編)、前掲書、138-139頁。
- 11) Gabrielle Roy, *Ces enfants de ma vie*, Les éditions du Boréal, 1993. (真田桂子訳『わが心の子らよ』彩流社・1998年) なお『マリア・シャプドレーヌ』からガブリエル・ロワにいたるケベック女性文学については、山出裕子『ケベックの女性文学—ジェンダー・エクリチュール・エスニシティー』(彩流社・2009年)、第1章、第2章参照。またロワの文学作品に関しては、以下の諸論文を参考にした。真田桂子「ロワにおける異邦人のフィギュール」『阪南論集 (人文・自然科学編)』Vol. 32, No. 4, 1997年、同「倫理的自伝文学についての覚え書き—ロワの自伝『あがなえし遙かな時』をめぐって—」『立命館国際研究』12-3, 2000年。
- 12) ヌーヴェル・フランスの時代、3分の1の家族は少なくとも10人の子をもったが、高い乳幼児死亡率のため成人するのは4〜5人止まりであったという。Yves Frenette, *Breve histoire des Canadiens français*, Les éditions du Boréal, 1998, pp. 22-23. ロワ家でも2人の姉が早世している。François Richard, *Gabrielle Roy : Une vie*, Boérial, 1996, pp. 33, 39.
- 13) マニトバの前身にあたるレッド・リバー植民地の人口は、1871年にフランス語系のメティス (先住民との混血) と英語系のメティスがそれぞれ約5700人、4000人でスコットランド系とフランス系白人が約1600人と報告されている。なおマニトバは、19世紀後半の20年間で人口が6倍に増加した。こうした点に関しては、溝上智恵子「多数派支配と少数派擁護の相克—マニトバ学校問題から—」『カナダ教育研究』6、2008年、55頁および鈴木敏和「マニトバ学校問題序説 (上)」『立正法学論集』20、1987年、32-33頁。
- 14) Richard, *op. cit.*, pp. 15-23.
- 15) Gabrielle Roy, *La détresse et l'enchantement*, Boréal Express, 1984, p. 11.
- 16) これは「マニトバ学校問題」としてカナダ連邦全体を巻き込む論争に発展した。詳細は溝上、前掲論文と鈴木、前掲論文さらに鈴木、「マニトバ学校問題序説 (下)」『立正法学論集』23、1990年を参照。また Frenette, *op. cit.*, p. 130.
- 17) Richard, *op. cit.*, p. 78.
- 18) *Ibid.*, p. 79.
- 19) *Ibid.*, pp. 80, 92.
- 20) *Ibid.*, pp. 124-135.
- 21) *Ibid.*, p. 135.
- 22) ロワはロンドンやパリで2年間を過ごしたのち、1939年に戦火迫るヨーロッパか

- ら帰国すると、モンリオールでジャーナリズムの仕事に従事した。そして1945年、大戦中のカナダ・フランス系住民の日常を描いた小説『束の間の幸福』で成功をおさめ、以後文筆家として活躍することになる。小畑・竹中（編）、前掲書、304-306頁。
- 23) Roy, *Ces enfants de ma vie*, p. 9. ロワ、真田訳『わが心の子らよ』、103頁。以下『わが心の子らよ』からの引用はすべて真田訳による。
- 24) *Ibid.*, p. 12. 同上、106頁。
- 25) *Ibid.*, pp. 41, 49. 同上、148、160頁。
- 26) *Ibid.*, p. 56. 同上、170頁。
- 27) *Ibid.*, p. 64. 同上、181頁。
- 28) *Ibid.*, p. 57. 同上、171頁。
- 29) *Ibid.*, pp. 75-77. 同上、196-199頁。
- 30) ヴァレリー・ノールズ、細川道久訳『カナダ移民史—多民族社会の形成—』（明石書店・2014年）、162頁。
- 31) 同上、164頁。カナダの総人口に占める移民の割合を1901年から10年ごとに見ていくと、1911年、1921年、1931年がもっとも高く、いずれも20%を超えている。同上、356頁。
- 32) 細川道久「兩次大戦間期のカナダ社会における『白人』の序列化」『鹿大史学』57、2010年、8-9頁。
- 33) Roy, *La détresse et l'enchantement*, p. 125.
- 34) Richard, *op. cit.*, p. 135.
- 35) Roy, *Ces enfants de ma vie*, p. 140. ロワ、真田訳『わが心の子らよ』、40頁。
- 36) *Ibid.*, pp. 184-185. 同上、98-99頁。